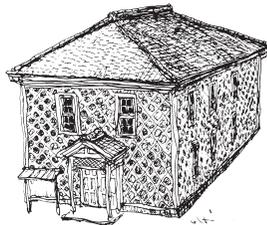


## 演説館



福澤先生とその門下生たちは、西洋のスピーチ、ディベートを研究し、わが国の「演説」を創始しました。三田演説館は、1875（明治8）年に開館した日本最初の演説会堂です。

●総合政策学部長

つちやもとひろ  
土屋大洋

# 政策の研究は究極の実学

慶應義塾の湘南藤沢キャンパス（SFC）はこの4月に開設30周年を迎えました。

SFCには3つの学部と2つの大学院が設置されています。最初にできた2つの学部のうちのひとつが総合政策学部です。設立準備委員会がこの名前で合意するまでにはかなりの議論を要したといわれていますが、今では総合政策学部やそれに類した名前の学部・学科・コースが日本全国の大学に見られます。

日本で政策を対象とする最初の大学院は、1976年の筑波大学、翌77年の埼玉大学でした。その後、多くの政策を学ぶ大学院が設置されています。

大学院ではなく、学部レベルで政策を学ぶという野心的な試みを始めたのがSFCの総合政策学部でした。1年生から専門科目に取り組み、当時はまだ珍しかったインターネットやプログラミングを必修にし、外国語も徹底的に教えました。

外から共通して聞かれた質問は「総合政策学とはどんな学問か」ということでした。30年間で私の前には7人の総合政策学

部長がいます。ゆるやかなコンセンサスは、総合政策学は特定の領域ではなく、手法を指すということでした。政策を扱うわけですから、政策があるところすべてが対象領域となります。外交、安全保障、社会保障、文化、財政、金融など、いくらでも対象領域は広がります。企業や非営利組織の経営もまた政策の領域に含まれます。現代の問題領域が広がれば、必然的に総合政策学の対象とする領域も広がっていきます。

総合政策学でやってきたことは、簡単に言ってしまうと、重要な問題を見出し（問題発見）、それへの対処法を示す（問題解決）ことです。しかし、それには高度なセンスが必要になります。既存の学問領域もしっかり学んだ上で、透徹した洞察力を持って現実を見なければ、問題を見出すことすらできず、まして現実的な解決策を提示することはできないでしょう。

総合政策学は究極の実学であり、自作古の試みです。政策を考えることは未来を考えることであり、より良い社会を目指して公義に生きる人材が育つ学部であってほしいと思います。